

しまねの社会教育だより

島根県立東部社会教育研修センター
vol. 35
島根県立西部社会教育研修センター



photo 松江市「宍チャレ! 第2回メイシコウカンカイ『宍道高校×宍道』」(宍道町青少年育成協議会・宍道公民館)

特集 これからの「しまねの社会教育」への期待 2022. 9月号 ～島根県教育委員会 野津建二教育長に聞く～

contents

- 「住民とともに育てる事業づくり」をめざして
- 学びがチカラに!!〔西部県民センター 石央地域振興課 中平 律子さん〕
- わがまちの社会教育の実践紹介〔海士町・大田市〕
- しまねの社会教育 × 青山学院大学 コミュニティ人間科学部

特集 これからの「しまねの社会

今回は、島根県教育委員会 野津 建二 教育長に、しまねの社会教育への思い、期待することを語っていただきました。

「学ぶこと」「教えること」の大切さ



島根県は、決して経済的に豊かというわけではありません。誰もが経済的豊かさを実感できているわけでもありません。しかし、島根の人たち一人ひとりを見ていると、そんなに暗く生きておられるわけではなく、一人ひとりがとても一生懸命生きておられるし、高齢となっても笑顔で暮らしておられる、そういう生活ができています。経済的に豊かではないけれども、人生が貧しい訳ではありません。それはなぜかという、私は、経済的豊かさとは別のことで心が満たされることがあるからだと考えています。

戦後の高度経済成長から、人の生き方は大きく変わってき

ました。都市部への人口集中、経済的なもので生活を満たそうとする、そういう社会を迎えたのです。ただ島根では、私が日本の「伝統」と考える「人と出会う」「会話をする」「人と触れ合い、つながる」といったものが廃れずに残っていると考えています。心が豊かになる要因として、私はやはり「人と人のふれあい・つながり」といったものが生み出す満足、心が満たされるということが、人としての豊かさを一番感じることになるんだろうと思います。島根には、そういう価値観をもっている人が多いのだと考えます。しかし、これは自分で学んだり、人から教わったりしないと、なかなかできることではありません。島根のような環境の中でも、人と人のかかわりがないままだと、行動に移すことはできません。人間のすばらしさとは「学ぶことができること」「教えることができること」です。このことを生かせば、島根でももっと豊かな人生を送られる人が増えると信じています。学びと教えをきちっと生活の中に、地域の中に確立するということが、住民のための行政の大きな役割の一つだと考えます。行政が直接何かできるわけではありません。人がやるのですから。行政は、人が人の学びを促したり、あるいは教えたり、そういうシステムをきちんとつくっていく。そのことが、地域を守り、維持・発展させることにつながるのです。この社会全体のシステムを、私は「社会教育」と捉えています。

「活動を起こせ」に込めた思い

社会のシステムとしての社会教育とは、人の学びを促し、導くことで、成果として学んだ人が地域で心豊かに生きていくということです。数値化できるものではありませんが、なんとなく笑顔が多いな、なんとなく家から外へ出てるな、町へ出てるなとか…いろんな場面があるんでしょうね。その携わる人の接し方もいろいろあるんだろうなと思います。そういったものが地域の隅々に浸透していくためには、ある程度組織立ててやる必要があります。組織立ててやるのが一番効果的です。そして社会教育を支える人を、プロとして確保し取り組んでいってもらう必要があります。それが教育委員会や公民館等です。さらにはNPOの方々など、他に職業をもちながら、やっていただいています。これもとても大切なことです。

社会教育におけるいわゆる「導く側」の人たちは、取組を

進めていくうちに、だんだん慣れてくると自分の活動、自分が動くことが目的になってしまうことがあります。どれだけ動いてきたか、どれだけやってきたかが目標になってしまいがちです。でも、本当はそうじゃなくて相手をどれだけ動かしたかということに、常に意識をもっていたきたいです。

住民の気持ちや行動の変容など、具体的に「何かを始める」「今までと違う動きをする」というところが成果であり、目的なのだと考えています。そのことを常に意識するために、県民の皆さんの日常生「活」に普段ない「動」きを起こせ＝「活動を起こせ」と言葉をたてました。「活動しろ」ではなく、「起こせ」なのです。これは、以前から使っている言葉なのですが、一つの行動指針として、今の若い方や新たに社会教育に携わる方に、その意味を再認識していただけたらと思っています。

教育への期待

島根県教育委員会
野津建二教育長に聞く



これからのしまねの社会教育に期待すること「学びのサイクルのアシスト」

まずは「人々を家から外に出すこと」が大切です。それにどうアプローチするか、これは島根創生計画(令和2年3月)にも掲げていますが、個人の趣向を中心に集団化していくということです。例えば、「スサノオマジック」を観に行くだけでもいいんです。試合中に盛り上がり隣の人とハイタッチをする。それも1つ壁を越えたと言えます。同じような趣向を持っている集団のところへ行ってみる。そうやって世界を広げていくことで、他人の人生を自分も共有・体験することになります。つまり誰か1人とかかわることは、人生体験が2倍になるということです。公民館等で行う講座の有用性はここにあると考えています。参加してもらえよう人を導く、または、町に引き出すための入り口的な役割を担う、そのような社会教育的に大きな役割が公民館等にはあります。

子どもとのふれあいにも学びがあります。子どもの成長を見るという機会は、その子の成長を俯瞰して見ることになり、自分にとって倍速で勉強になるのです。私は、子ども達にレスリングの指導を20年続けています。子どもへのかかわり方は、同じ大人でも指導者と保護者と異なります。例えば試合後に、親と指導者が両方怒ったら、子どもは行き場がないですよ。子どもへのかかわり方からも学びがあり

ます。子どもって面白いですよ。無垢ですから。

人とかかわることで人生観が少し変わり、広がる。すると今まで受け手だった人も、困っている人や助けが必要な人に対して行動を起こそうとします。そして実際にやってみることで、相手に感謝されたり、相手の気持ちや行動に変容があったりすると、より相手の役に立ちたくなります。より良い方法を考えます。「その次はもっと…」とさらに考えます。そういう気持ちを満たそうと、努力することが向上心です。その向上心による学びが“自転”していけばいいのですが、そう簡単なことではありません。だからこそ、その学びを我々社会教育に携わる者が導いていく必要があるのです。「こういうことがあるよ」「こういう人がいるよ」とアシストすることで、どんどん成長していく。そのサイクル自体が、「心豊かになる」ということです。

人間いくつになっても、向上心が大きなり小なりあります。それによって心が満たされる社会が確かにあるんですね。その心豊かな地域社会、心豊かな生活につながる地域社会の正体って、学びのサイクルができる関係にあることなのだろうと考えています。

社会教育にかかわってくださっている方々へ

住んでいる人が満足する地域として在り続けるためには、ほったらかしにしていはいけません。やはり、人が努力していく必要があります。私は、その支え続ける人の中心の一つに、社会教育にかかわってくださっているみなさんがいると思っています。

生活水準についての捉え方は、個人でいろいろだと思いますが、それを越えて「やっぱり毎日楽しいな」と感じていただきたいです。島根創生計画の「『笑顔あふれるしまね暮らし』宣言」にあるように、普通の暮らしをしていて、そこで笑って過ごせる。「人がどうなるのか」ということが目標なのです。

そして具体的に「人」にアプローチするのが、社会教育に携わっているみなさんです。地域住民の行動変容とか、満足する形は「笑顔」、最後の最後には人が笑ってるなあと、思えたら正解です。合格です。「笑えたらいいんだ」、そういう生活が「笑顔あふれるしまね暮らし」なのです。日常の中の笑顔という意味で、この言葉を創りました。それを実現す

るためには、社会教育の力がとても大きいと考えています。ですから、しまねの社会教育に携わっていただいているみなさんには、そういう思いで、島根の将来をつくっているという気概をもって、これからも取り組んでいただきたいと思えます。よろしくお願いします。



「住民とともに育てる事業づくり」

「種」から「住民とともに」育てる事業づくり

昨年度より、研修センターで公民館等の職員を対象に開催している「公民館等職員研修」の内容をリニューアルしました。

【令和2年度まで】

- ・各公民館等から事業計画を持ち出して、PDCA サイクルを活用しながら事業のあり方を再検討する内容

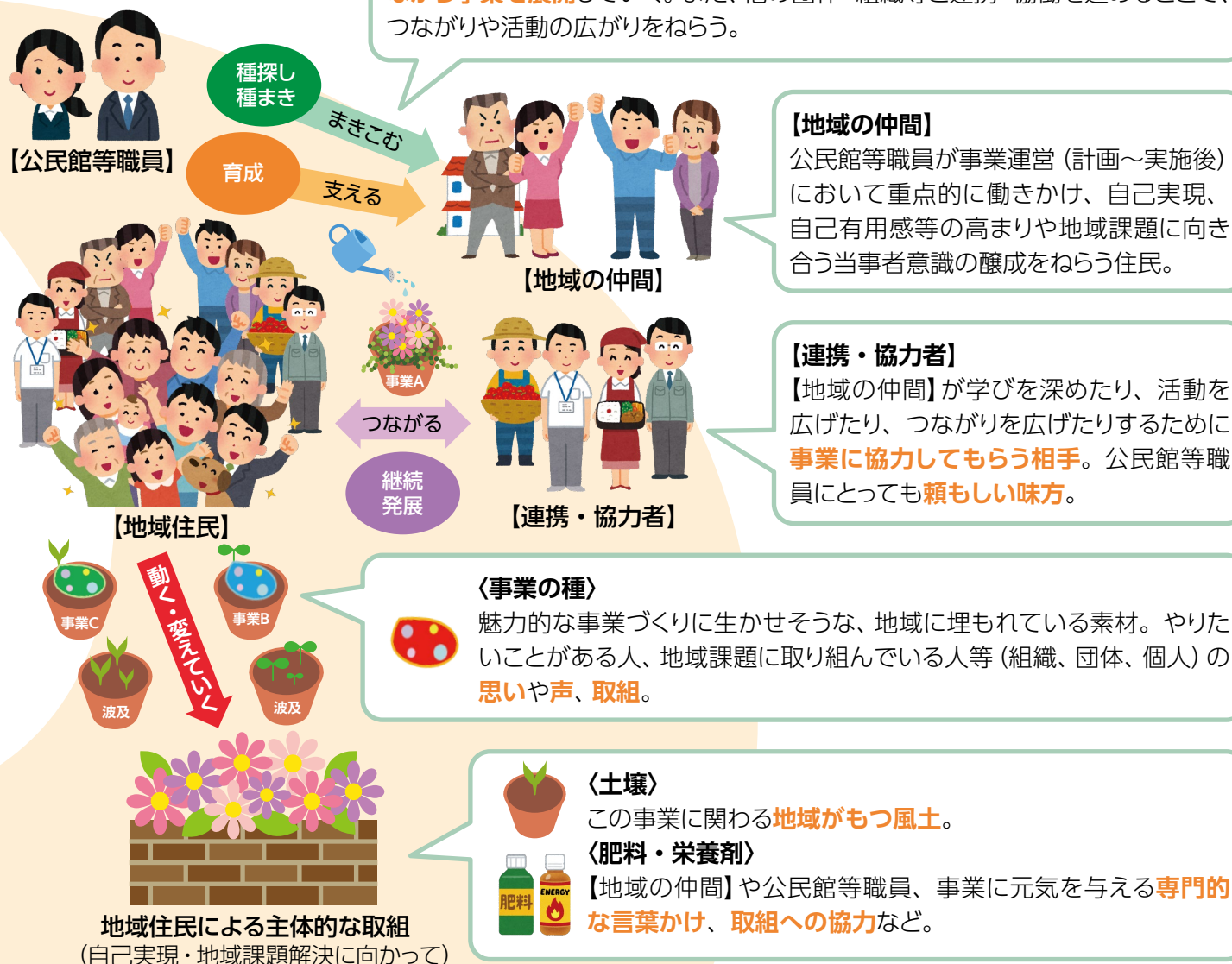
【令和3年度から】

- ・地域の中から事業の「種」を探し出し、住民とともに事業をつくりあげていく内容

公民館等職員の熱い思いを受けて、地域住民が主役となって地域づくり・ひとづくりに参画していくような事業をめざした研修をつくっていきます。



① 研修のイメージ



をめざして

リニューアル「公民館等職員研修」 ニュー「公民館等職員専門研修」

② 研修のねらい

「社会教育」を基盤とした人づくり・つながりづくり・地域づくりを意識した公民館等事業を実施することの必要性を理解し、公民館等職員に求められる実践的な資質・能力の向上を図る。

市町村の公民館等職員、社会教育担当者等を対象とした実践発表会を実施し、市町村内外へ成果を波及させる。

③ 研修の概要

| 回 | テーマ | 主な内容 |
|-----|-------------------------------|--|
| 第1回 | 「種」から住民とともに育てる事業 | 【講義】「住民の学びを生かした公民館等事業」 【事例発表】「住民とともにつくる事業の実際」 【演習①】「事業の“種”探し」 |
| 第2回 | 「住民をその気にさせて巻き込むポイント」 | 【演習①】「住民とともに事業をつくるため、住民をその気にさせる働きかけとは」 【演習②】「事業計画づくり」 |
| 第3回 | 「事業実施に向けての悩みをみんなで解決!」 | 【演習①】「事業づくりの悩みの共有と解決方法を探る」 【講義】「事業評価の必要性と評価のポイント」 【演習②】「評価アンケートの作成」 【演習③】「事業計画のリデザイン」 |
| 第4回 | 「事業のセールスポイントと成果を伝えるプレゼンテーション」 | 【演習①】「事業の振り返りと今後の展望」 【講義】「プレゼンテーションの基礎知識」 【演習②】「プレゼンテーションの企画」 |
| 第5回 | 「紹介します!わたしの実践」 | 【実践発表】「紹介します!わたしの実践」 |

公民館等の核となる職員が考える“これからのしまねの公民館”

「住民とともに育てる事業づくり」を公民館等で一体的に進めていくためには、公民館等の一事業だけでなく、各事業に住民の主体的な学びの場を取り入れていくことが大切です。そこで、公民館等における事業を俯瞰的に、総合的に見ることができる職員の方（主に主任主事、チーフマネジャー等の公民館等の中核を担う方）を対象に、今年度は新たに「**公民館等職員専門研修**」を計画しました。

公民館等の中核を担う皆さんの新たな学びの場、情報交換の場としていただけるよう、準備を進めています。ご参加をお待ちしています。

公民館等職員専門研修

【期日】令和4年11月10日(木)

【場所】島根県立男女共同参画センター「あすてらす」(大田市大田町)

【対象】市町村担当者が推薦する公民館等職員

※主任主事、チーフマネジャー等、各館の中核を担っている
公民館等職員

【定員】40人

【講師】広島県大竹市立玖波公民館 河内 ひとみ 氏

※ご不明な点等ありましたら、東西センターまでお問い合わせください。



学びがチカラに!!

社会教育研修センターの研修で学んだことを、地域や現場での実践に活かしていらっしゃる方を紹介します



自分らしく、楽しみながら、学び続ける

西部県民センター 石央地域振興課 中平 律子さん

中平さんは、会議の企画や進行をする際に、もっとよりよく運営・進行できるようになりたいと感じておられたそうです。そこで昨年度の「ファシリテーター養成講座」を受講されました。3回シリーズの本講座を終え、「新たな発見があった!」と言っておられました。

どのような発見・学びがあったのでしょうか。伺ってきたお話を紹介します。

①「準備8割 本番2割」

『準備8割 本番2割』というお話が印象的でした。実際に進行する時には、起こりうるさまざまなことに瞬時にその場で対応しなければいけません。

そのためには、事前準備がいかに大切かを実感しました。ファシリテートする機会には、このことを今でも心に留めています。



ファシリテーター養成講座での様子

②「安心して話し合えるために」

いろいろなアイスブレイクを体験することで、話がやすくなる『場の雰囲気づくり』の大切さを学びました。私は人前で話すことがあまり得意ではないので、同じように感じている人が『安心して話し合えるために』場の雰囲気づくりを工夫していきたいと思いました。その後、みんなで実際にファシリテートしてみることで、お互いの姿から見て学ぶことができました。みなさん上手だなと思いつつ、『自分に合ったやり方でいいんだ!』ということにも気づきました。

③「学び」を生かして

地域活動を行う中高生やサポーターの方々をパネリストに、オンラインによるパネルディスカッションのファシリテーターを務める機会をいただきました。養成講座で学んだ上記の2点について、次のように生かしました。

①事前準備について

・(『パネリストの思いを引き出すには』『参加者に知ってほしいこと・参加者が知りたいことは』などの視点から) どんな質問をすると良いか吟味しながら準備した。

→話し合いの流れのなかで、問いかけたり、話を促したりする際に役立ちました。

②「場の雰囲気づくり」について

・高校生にいつもどおり安心して臨んでもらうため、事前に顔合わせを行い『良いことや正しいことを言おうとしなくても良いんだよ』と言葉かけを行った。

・アイスブレイクとして、学生時代に大道芸サークルに所属していた経験から、バルーンアート(『動物クイズ』やバルーンを飲み込むマジック)を披露した。

→高校生は、驚く様子を見せるなど少しは楽しんでもらい雰囲気を和ませることができたかなと思います。

④さらなる「学び」を求めて!

講座の中で、会議の「見える化」の重要性を感じていました。独学ですが「グラフィック・レコード」に関する本を読んで勉強しています。職場の会議で実践しているところですが、話し合う視点や出た意見について見て確認でき、周囲の反応も好評でホワイトボードを新たに買っていただきました。(笑)

社会教育から得た学びを、地域振興の現場で実践しておられる中平さん。その姿を見た同僚の方々から、ワークショップの手法について相談を受けることもあるそうで、中平さん曰く「地域魅力化プログラムは、私にとっての『バイブル』」なのだそうです。



社会教育の実践紹介



海士町版コミュニティ・スクール

～これからの町を担う、あまっこを育てるために～

海士町教育委員会 派遣社会教育主事 池田 高理

海士町では今年度からコミュニティ・スクールの制度を導入しています。町内には2つの小学校と1つの中学校があります。海士町版コミュニティ・スクールでは、3つの学校で1つの学校運営協議会を設置しています。この協議会は、学校の運営方針に意見を述べる場というよりは、どんな子どもたち(あまっこ)を育てていきたいか、どんな地域にしていきたいかを話す場としています。話し合ったことは、それぞれの学校運営に反映させていく仕組みづくりを目指しています。会長の笹鹿岳志さんは、「海士町はもともと学校と地域が協働する地盤があるので、それぞれが行って

ることを共有し、発信していく場としてこの協議会が機能していくとよい。」と話してくださいました。第1回の学校運営協議会では、各学校の活動を参加者に伝える『学校PR大作戦』を行いました。各学校教員が推進委員に向け、自校の方針や活動内容を紹介しました。今年度あと2回開催する予定です。今後、この学校運営協議会を通じて、地域と共にこれからのあまっこを育てていく土台となるコミュニティ・スクールになることを期待しています。



学校運営協議会の意義や目的についての説明



学校PR後に各グループで出された意見を全体で共有

海士町のコミュニティ・スクール制度(以下CS)は小中3校に対して1つの学校運営協議会を設置したところが大きな特徴です。このことにより、海士の子どもをどう育てていくかについて共有し、地域全体ですべての学校を支援していく気運が高まっています。また「学校PR大作戦」では管理職だけでなく若手職員も参加し委員の方々と親睦を深めました。学校と地域の実態に即したCSにしていくことで相互理解を深め、よりよい活動を継続してほしいと思います。
(隠岐教育事務所 社会教育スタッフ企画幹)



しゃべりばおおもり ～世界遺産と共に暮らすまちづくり～を実施して

大森まちづくりセンター 田原 功美

大田市社会教育推進センター 高山ブロック 横田 良子

私たちは昨年度、様々な年代の住民の声からまちづくりの「種」を見つけるため、まちづくりセンターと公民館(現・社会教育推進センター)とが連携して、ワークショップを開催しました。先輩住民、移住者、市内高校生、小学生と様々な参加者によって行うこの事業を開催するにあたり、私たちは各々の得意分野を活かし、事業協力者へのアプローチを行いました。多くの人に関わってもらうことの難しさもありまし

たが、「まちづくりにおけるひとづくりの大切さ」を改めて感じました。

この事業により、地域の未来を考える新たな団体との共創の動きも生まれ、連携により点が線となり、それが面となっていくことを実感する事業となりました。今後も大森町の住民だけでなく、市内中高生など多様な主体と共創してふるさとづくり事業を継続していきます。



様々な視点から大森町について語る様子



高校生・移住者による発表、各グループの意見の共有

大田市は教育部局所管の公民館(社会教育)機能を、首長部局所管のまちづくりセンターへ引継ぎます。従ってこれまでの公民館は、まちづくりセンターを支援する「社会教育推進センター」に名称変更しました。そんな中、本取組は大森まちづくりセンター主催の「しゃべりばおおもり」に、高山ブロック社会教育推進センター(旧高山公民館)が支援しています。様々な世代や立場を超えてひとを繋ぎ、まちづくりの「種」を見つけ出す仕掛けを施して、住民の願いを同じ方向へ導き出していることが、極めて大きな強みです。
(浜田教育事務所 大田市派遣社会教育主事)

今号より、リニューアルしました。特色ある「しまねの社会教育」×〇〇と題して、社会教育と各方面の関係者、機関等とのコラボレーションを紹介したいと思います。

第1弾は、「しまねの社会教育×青山学院大学コミュニティ人間科学部」です。「親学プログラム」を通して、家庭教育支援について学ぶ学生の姿を紹介します。

「おうちで参加できる親学プログラム」の開発に挑戦

—新型コロナウイルス感染症拡大と向き合うなかで—

青山学院大学コミュニティ人間科学部 准教授 小川 誠子

青山学院大学コミュニティ人間科学部は、「地域活動を推進できる人」「地域を活性化できる人」「地域文化を継承できる人」「学び続けることのできる人」を育てていくことを目的として、2019年春に神奈川県相模原キャンパスに開設された新しい学部です。地域課題解決を重視する本学部のカリキュラムにおいて特に注目されているのが、地方自治体・施設・NPO法人・企業などの協力を得ながら、全国約30ヶ所で展開される3年次の地域実習です。

「島根県の社会教育事業」は、上記約30ヶ所で展開される地域実習プログラムの1つです。このプログラムでは、活気ある島根県の社会教育事業を把握し、島根県立青少年の家のサン・レイクフェスティバルにおいて、「親学プログラム」の企画・立案・実施を通して家庭教育支援について学ぶことが盛り込まれておりました。しかし、2021年10月に予定されていた現地での実習は、新型コロナウイルス感染症拡大のため諦めざるを得なくなりました。現地での実習が中止となったとき、正直、途方にくれました。しかし、島根県の担当者の方々とは相談しながら、島根に行くことができなかったからこそできること（価値）を追求しようと、頭を切り替えました。「おうちで参加できる親学プログラム」の開発に挑戦してみようという思いは、その追求のプロセスのなかから生まれました。



写真1 「おうち食堂提案会」司会進行中

「親学プログラム」は、基本的に対面で実施されてきたプログラムです。そのプログラムをオンライン・バージョンに変えるため、学生たちは大変苦労したことと思います。島根県の担当者の方々からアドバイスをいただきながら、学生たちが作り上げた「おうちで参加できる親学プログラム」は、「おうち食堂提案会」（写真1）と「SNSとの関わり方—子どもを危険から守るために—」（写真2）です。前者のプログラムでは、アイスブレイクで野菜ビンゴをしてそれをワークにつなげました。後者のプログラムでは、Google Jamboardを使って

SNSに関する意見を集約しました。本番では、ハウリングや時間の調整などうまくいかなかったこともありましたが、学生たちは、高いハードルを乗り越えて見事にやり切ってくれました。当日は、島根県の出雲市と安来市の親学ファシリテーターの方々や神奈川県相模原市の男女共同参画推進センター（ソレイユさがみ）の職員の方も、オンラインでご参加くださいました。島根に行くことができず、学生たちはとても残念と思ったに違いありません。でも、私たちの地域実習がきっかけで、地域（島根県）と地域（相模原市）が繋がっていくことがあれば、それはとても意味のあることだと思います。島根県の担当者の方々とともに学生たちが作り上げた「おうちで参加できる親学プログラム」は、地域と地域のつながりを実現していく上で、これからも重要な役割を担っていくことと思います。



写真2 「SNSとの関わり方—子どもを危険から守るために—」
ブレイクアウトルームでSNSに関する問題について検討中

東部社会教育研修センター

〒691-0074 出雲市小境町1991-2 サン・レイク2F
Tel.(0853)67-9060 Fax.(0853)69-1380

URL: https://www.pref.shimane.lg.jp/tobu_shakaikyoiku/
E-mail: tobu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

西部社会教育研修センター

〒697-0016 浜田市野原町1826-1 いわみーる3F
Tel.(0855)24-9344 Fax.(0855)24-9345

URL: https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu_shakaikyoiku/
E-mail: seibu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

第36号は
2月末
発行予定